

ごあいさつ



日本WHO協会 理事
弁護士
岩本 洋子

コロナ禍で考える医療と人間 ～専門的な医療と一般の人間の双方向 から考える～

コロナ禍で「医療崩壊」とか「医療逼迫」とか言われて、新聞にもそのような文字が毎日載るのですが、それは「医療の問題」ではなく病気になった「人間」の問題であることを実感する出来事がありました。

大阪で毎日、1000人を超えるコロナ陽性者が出ていた5月のことです。知人から「入院できず自宅にいる友人が10日間も自宅で発熱している。この人（50才）をなんとか入院させてやって欲しい！！」と私に電話があったのです。しかし、そのような「裏口入院ルート」があるはずもなく、その時はお断りして終わりました。その後、その人は血中酸素濃度が80台になって、救急搬送され、やっと入院できたそうです。この後、私は新聞やテレビで「全国の死者〇人、大阪の死者〇人」と報道されるのを毎日見ながら、電話の人が「死者」の数の中に入っていたらどうしようかと真剣に考えました。幸いこの人は回復できたのですが、毎日1000人がコロナ陽性になって「医療崩壊」が起きているということは、医療現場の問題というより人間が医療を受けられず、自宅で苦しんでいるという人間の問題であることを実感しました。

～専門分野と一般社会の橋渡しを～

日本WHO協会は、これまで医療を目指す若者の支援者であろうと努力してきました。そのためのプログラムも、インターンシップ助成など、毎年いくつかを実施しています。それに加えて、今回のコロナ禍での医療と一般の人との関わりをみて、日本の最先端医療の中で生活をしている一般の人間の側からの記事を、この「目で見えるWHO」に入れられないかな、と思いました。専門の人の読み物だけでない「一般の記事」です。

私は弁護士をしていますからわかるのですが、法律は専門的な技術がないと作ったり、解釈したりするのは難しいのです。しかし、その法律が適用されるのは一般の人に対してです。

医療も法律も同じです。一般の人に読まれる雑誌をつくり、一般の人に理解される日本WHO協会をつくること、を目指せればと思います。

2021年10月